

CATCH the NEW!

■ケンティン・タランティーノ来日記者会見。  
94年カンヌ国際映画祭グランプリ受賞作  
『パルプ・フィクション』を語る。

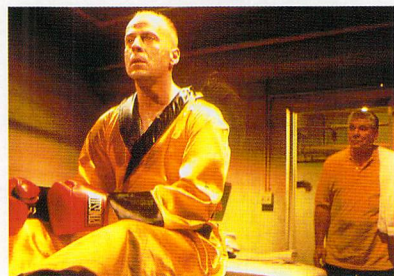


映画少年だった青春時代。売れない役者をやりながら、自ら監督した二作目で今年のカンヌグランプリをさらったケンティン・タランティーノが、受賞作『パルプ・フィクション』を引っ提げ来日した。ジョン・トラボルタ、ブルース・ウィリス、そしてタランティーノ・ファミリーと呼ばれる、彼の作品でお馴染みの役者達をズラリ揃えたこの物語は、異なる二つの出来事が交錯し、やがてはパズルの如く一つになるといふ風変わったオムニバスである。

画への情熱にそのまま通じているように思える。今回のカンヌ受賞についての感想は。「私は、万人受けする作品ではなく特定のだけに受ける作品を作っているのです。大嫌いだという人がいれば大好きだという人もいるでしょう。だから、まさかカンヌで12人の審査員全員に支持されるとは、思ってもみませんでした」

ご存じの通り、彼の日本好きはつとに有名である。『パルプ』でも、災難に巻き込まれたブルース・ウィリス用いる武器はナント日本刀。ヤクザ映画を数えきれない程見、ソニー千葉こと千葉真一の大ファンであるタランティーノと、日本映画との関係は、「ブルースのシーンは、ヤクザ映画にインスパイアされて脚本を書きました。彼が日本刀を下げ階段を駆け下りる場面、あれは高倉健をイメージしたんです笑。でも本当は『子連れ狼』みたいに、斬れば血がドツと飛び散るようなやつにしたかった笑。悪役の二人組は、ソニー千葉の『影の軍団』の影響を受け思いつきました。振りも私が考えてね。難しいのは、斬るよりも斬られる役の日本的斬られ方!と云って大きな振りも、もたえ死ぬマネをする!私が先生になって、俳優達に教えたんですよ。彼ら、ちゃんと日本的な死に方をしていたでしょう?」

「是非、是非、一緒に仕事したい!」



【パルプ・フィクション】京都ロキシーにて公開中。

取材・文/木村紀子  
協力/松竹富士株式会社  
東京・帝国ホテル

でも私にとってあまりにも重要な人なので、本当に彼にびっぴりの脚本ができた時にお願いしたいです。もし千葉さんを使うなら、その時はハーヴェイ・カイテルと共演させたい(中略)。彼らは背格好といい雰囲気といい、とてもよく似てるものがあるんです」

千葉真一について語る時の表情は、まるで自分のヒーローについて話す子供のように、無邪気そのもの。

『レザボア・ドッグズ』は物事がすべって悪い方悪い方へ行ってしまうという、いわゆるBad Luckの映画でした。いわゆる『レザボア』の撮影前、私自身、何をやってもついている男だった(中略)。逆に『パルプ』はLuckの映画です。血なまぐさくなりそうではない。最後には全てがうまくいき、そこには妥協があり慈悲がある。そしてこれを作っている時には、映画と同じく私の状態も非常によくなっていたんです。今にして思えば、自分を巡る状況が何らかの形で私の作品に反映されてくるのかもしれません」

この1年は監督業を休み、俳優としての活動が決定している。ファンとしてはどちらのタランティーノも見たいところだが、今後しばらくは、スクリーンの中の彼に会うことになりそうだ。

8月26日、渋谷パンテオンにて千人の観客を集めての『パルプ・フィクション』審判試写会が行われた。試写後、タランティーノ監督と観客のトーク・バトルが始まったが、突如舞台上に登り監督にキスをする女性や、次回作に出してくれと頼み込む男性まで現れ場内は騒然。

